



Title	アルチュセールにおける読解の循環性について：弁証法的循環と自己言及的循環の混同の分析
Author(s)	池田, 清
Citation	études françaises. 1998, 31, p. 93-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルチュセールにおける読解の循環性について ——弁証法的循環と自己言及的循環の混同の分析——

池 田 清

はじめに アルチュセールに関して、その1990年の死後、未定稿も含めた多くの論文集が現在も刊行中であり、この新資料から新しいアルチュセール像が探究可能であろうが、1960年代前半の論文を集めた『マルクスのために』、及びバリバルなどが参加した『資本論』の研究セミナールにおいて1965年前半に発表された論文を集めた『資本論を読む』、1965年に上梓されたこの二冊の論文集をその主著とみなし、さしあたり、そこにアルチュセール像の焦点を求めることに異論の余地はないであろう。確かに、アルチュセールも確認している通り、それらは、50年代から60年代にかけての時代の刻印——例えば、ソビエト共産党第二十回大会（1956）におけるスターリンに対する個人崇拜・教条主義（ドグマティズム）の断罪などの政治的状況、あるいはその反動的批判として生まれた「解放」の称揚、つまり「自由」「人間」「人格」「疎外」という古い哲学上の主題の再発見によるマルクス主義的ヒューマニズムの称揚、さらには国境の外に価値あるものはないというフランス国民固有の「恐るべき哲学的文化的田舎者根性（我々の排外主義）」（PM, 17）¹⁾を背景にしたフランス共産党におけるマルクス主義理論の「フランス的貧困」（PM, 13）という理論的状況——を色濃く帯びている。これが出版後わずか二年にして、そこでの自らの立場を「理論偏重主義 théoricisme」として自己批判を始める一因でもあるのだが、ともかく、そこには「マルクスへの回帰」を掲げることによって、以前のヒューマニズム的・疎外論的あるいは経済決定論的マルクス主義解

釈を一新したばかりか、今日のアルチュセールのマルクス主義という一派を設立し得たアルチュセールの思索が凝縮されている。正しい読解であれ、あるいは誤った読解であれ、何らかのテキストの読解が読者に反論なり賛同なりを引起す際のその影響力の大きさに関して、それは、単にテキストのスクランダラスな主張に由来するのではなく、テキストの中で発想を論理的に突詰めて行く思索の密度に由来すると考えることができる。すれば、これら二つの論文集は、少なくとも現在刊行中の未定稿集も含めた諸論文の中でも、恐らく、比類のない思索の密度を有するであろう。

自己言及的循環と弁証法的循環 それにも関わらず、アルチュセールは、両論文集において、マルクスに対する自らの読解方法を論じる際に、テキストの読解に関わる循環に関して、注目すべき或る種の奇妙な誤解＝混同に陥っている。アルチュセールは『マルクスのために』の序文「今日的時点」の中で、この論文集の目的は「マルクス主義理論の還元不可能な独自性」を定義することであると述べた後で、次のように言う。

こうした定義はマルクスのテキストの中に直接的には読むことができないということ。円熟期のマルクスに固有の概念の在処を同定するためには、まさに先行的な批判そのものが不可欠であるということ。あらゆる解釈〔ここではマルクス主義理論の独自性の把握〕に絶対的に先行するこの〔マルクスに固有の概念の在処を同定するための〕批判的作業全体は、理論形成とその歴史の性質に関わる最小限の暫定的なマルクス主義理論の諸概念の適用を前提とすること。マルクスの〔テキストの〕読解は、理論形成とその歴史に関してこれまでとは異なった性質を持つマルクス主義理論、すなわちマルクス主義哲学そのものである科学認識論的 épistémologique 歴史の理論を先行条件としていること。〔従って〕この〔読解の〕操作は、それ自体、必要不可欠な循環を構成しており、この循環においては、マルクス主義哲学〔科学認識論的歴史理論〕をマルクス〔のテキストの読解〕に適用することは、マルクスを理解する〔マルクス主義理論の独自性を把握する〕ための絶対的先行条件であり、また同時にマルクス主義哲学の構築と発展の条件そのものとしても現れること、これは明白なことである。しかし、この〔読解の〕操作の循環は、

この種のあらゆる循環と異なって、或る対象の性質〔マルクス主義理論の独自性〕に関して立てられる問いの有する弁証法的循環であり、その対象を試練にかけながらも、自らその対象によって試練にかけられる理論的な問題機制 *problématique* から出発するということ。マルクス主義は、それ自体、科学認識論的な問いの対象であり得るし、そうであらねばならず、この科学認識論的な問いが立てられるのは、マルクス主義の理論的問題機制と関連してのみであるということ、このことは、単に歴史の科学（史的唯物論）としてだけでなく、また同時に、理論形成とその歴史の性質を解明できる哲学、従って自ら自身を対象とすることによって自ら自身を解明できる哲学として、自らを弁証法的に定義する理論にとって必然的なことである。マルクス主義は、こうした試練に理論的に立ち向かう唯一の哲学である。

(PM, 30-31 [] 筆者)

この一段には、「円熟期のマルクス」「科学認識論」「問題機制」「弁証法」「歴史の科学」などの主要な概念装置が出揃っており、各々説明を要するのだが、「循環」という点を中心に図式的に要約すれば、次のようになる。

- (1) マルクス主義理論の独自性はそのテキストの中には直接的には読み取ることができない。
- (2) そのため、その独自性を理解するためには、円熟期のマルクスに固有の概念の在処を同定せねばならない。
- (3) この同定のための批判的作業を行うには、「理論はどのように形成されるのか」に関する理論形成とその歴史を解明するマルクス主義哲学（＝科学認識論的歴史理論）が暫定的な形であっても先立たねばならない。
- (4) ここには「循環」がある。マルクス主義理論の独自性を読み取るために、マルクスのテキストを読解する際に、この読解後に得られるはずのマルクス主義哲学（＝科学認識論的歴史理論）を適用するという循環。
- (5) しかし、この循環は「必要不可欠」である。なぜならマルクス主義

哲学はこの読解の中での適用によって構築され発展するから。

- (6) テクストの読解の場におけるマルクス主義理論の独自性の把握とマルクス主義哲学とのこの「必要不可欠な循環」は、「弁証法的循環」である。なぜなら、マルクス主義は、その理論の独自性（歴史の科学）を把握しつつ、科学認識論的なその哲学も解明するから。

このように要約できるとすれば、アルチュセールは、ここで二つの循環を混同しているように思われる。それは、要点（4）の循環と要点（6）の循環との混同である。つまり「マルクス主義哲学をマルクスに適用すること」の有する循環と、理論形成とその歴史の解明を企図する科学認識論としてのマルクス主義哲学とマルクス主義理論の還元できない独自の対象である歴史の科学との「弁証法的循環」との混同である。アルチュセールは、マルクスのテキストの読解によって初めて知ることができるはずのマルクス主義哲学（歴史の科学認識論）によって、当のマルクスのテキストを読むという言わば自己言及的な循環と、マルクス主義哲学と歴史の科学との「弁証法的循環」との峻別に関して、『資本論を読む』は、一端両者の循環を区別しておきながら、結局はその区別を曖昧にしている。アルチュセールは、「マルクスのテキスト自体に内属する現実的諸困難」を次のような二点にまとめる。

- (1) 我々の問いは、従って、たとえ注意深くはあっても、字義的な読解以上のものを要請する。それは、真に批判的な読解であって、このマルクス主義哲学の原理そのものをマルクスのテキストに適用するのではあるが、その原理を我々は『資本論』の中に探究するという批判的読解である。この批判的読解は循環を構成しているように思われる。それというのも、我々はマルクス主義哲学をその適用そのものから期待しているように思われるからだ。従って厳密に次のように言おう。我々が、マルクスが我々に顕在的な形で与えてくれた、あるいは切断期及び成熟期の彼の著作から引き出されることができる哲学的原理による理論的労働 [『資本論』の読解作業] から、つまり『資本論』に適用されたこれらの原理による理論的労働 [『資本論』の読解作業] から期待するのは、それらの原理の発展、充実であり、同時にまたそれらの

厳密さの洗練である。この循環は、目を引くものではあっても、我々を面食らわせることはあり得ないであろう。あらゆる認識の「生産」は、その過程の中にこの循環を含んでいるから。

(2) もう一つの困難は、今度は、『資本論』におけるマルクス主義哲学の対象の現前と区別に関わるのではなく、『資本論』自身の科学的対象の現前と区別に関わる。[...] たとえマルクスが曖昧さなしに自分の対象の概念を定式化したとしても、彼は、必ずしも同じ明晰さで、自分の対象の区別の概念、すなわち古典派経済学の対象から自分の対象を区別する種差の概念を定義しなかった。[...] [従って古典派経済学からマルクスを区別する] 科学認識論的で批判的な読解なしでは、[...] マルクスと彼の前史との関係に適用される認識の生産の歴史の理論に訴えることなしには、従ってマルクス主義哲学の諸原理に訴えることなしには、この成果[『資本論』自身の科学的対象の現前と区別]を願うことはできない。[...] マルクスが古典派経済学の対象から自分の対象を区別する差異を厳密な概念で思考するのに感じたように思われる困難は、[...] マルクスの発見が、当時利用可能であった哲学的概念よりも理論的に非常に進んでいたという事実に由来する。この場合には、マルクスの科学的発見は、その新しい対象の面食らわせる性質によって必要とされる新しい哲学的問題の提起を否定なしに要請する。この理由によって、哲学は『資本論』の掘り下げた読解そのものへと招請されることになるが、それは『資本論』というテキストが哲学に提起する驚くべき問い、つまり哲学自体の未来にとって決定的で斬新な問いに答えるためである。(LC, 248-249 [] 筆者)

アルチュセールは、(1) の前半部分で自己言及的循環を確認しているが、「厳密に」言い直したにも関わらず、その後では、この循環を、マルクス主義哲学の諸原理の発展、充実及び厳密さをもたらす「あらゆる認識の《生産》」に固有の循環として、すなわち先の「弁証法的循環」として捉え返している。ここには、マルクス主義哲学の適用に関わる自己言及的な循環と、マルクス主義哲学と歴史の科学との「弁証法的循環」との取り違えがある。

『資本論』読解の位置づけ しかも、アルチュセールが、自己言及的循環を言い、「弁証法的循環」を言うのは、『資本論』の読解に関してであり、つまり、二つの循環が存在するのは『資本論』という唯一のテキストにお

いてであって、決してマルクスの複数のテキストの間にではないにも関わらず、(1) の引用の後半部分はこの『資本論』の読解の位置づけに関して誤解を招きかねない。アルチュセールは、「マルクスが自らの革命的な理論的企てに相応しい概念的な用語法と概念的体系を生産し、仕上げ、固定するのに費やした長い期間」(PM, 26) をイデオロギーの時期と科学の時期の対立関係に基づいて、暫定的と前置きしながらも、青年期、切断期、成熟期、円熟期の四つの時期に区別する (PM, 27)。勿論、こうした時期区分は事後的になされるものであり、『資本論』の読解をまって初めて遡行的に可能となるのだが、しかし、この遡行的な区分の性格を見誤ってはならない。引用の後半部分は、切断期及び成熟期に分類される『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』の中に読み取れるマルクスの哲学的原理を成熟期の著作である『資本論』に適用し、その原理をより発展させ厳密化するということを意味しているように読める。だが、この場合には、アルチュセールは、マルクス主義哲学の発展や厳密化を『資本論』の読解以前から『資本論』に期待していることになるが、このように期待することができるのであれば、それは、アルチュセールが批判するヘーゲル的な目的論的視点を暗に導入した上でのことでしかない。この種の読解は、「これらの同じテキストの方向づけられた、すなわち目的論的読解」(PM, 54) であって、円熟期の『資本論』をマルクスの思想の到達点とみなし、それ以前の著作は、このマルクスの思想の等質的な連続的発展の諸部分であるという考え方、すなわち「各々の部分は、全体的部分であり、部分にそのまま宿る全体を直接的に表出する」と考える「表出的全体性 *totalité expressive*」の理論 (LC, 8-9) が、暗黙の内に前提されている。アルチュセールは、こうした全体性と部分の等質的な表出関係を想定する「《表出的》読解」(LC, 32) を「認識の鏡像的神話」(LC, 11) と称している。だが、そもそもマルクスのテキスト全体の読解によって得られるはずの四つの時期区分に基づいて、マルクスのテキスト読解のあり方を論じる立論

は、こうした目的論的視点に基づいた回顧的錯覚でしかない。そうではなくて、アルチュセールが問題としているのは、マルクスの著作期の時期区分の起点となる『資本論』の読解の仕方なのであって、ここに、アルチュセールが『資本論』の読解方法を論じる理由があるわけである。

『資本論』の読解こそが問題であるということは、(2)の引用から明らかである。(2)では、マルクス主義哲学の適用によって明らかにされるべき成果＝目的は、マルクスの科学的発見であり、『資本論』の科学的対象の現前と区別であること、そしてこの科学的発見によってマルクス主義哲学は、新しい問題を提起されざるを得ないということ、換言すれば、マルクス主義哲学とマルクスの科学的発見である歴史の科学の「弁証法的循環」が見出されるのは、『資本論』の読解においてであるということである。

このように、アルチュセールは、「マルクスのテキスト自体に内属する現実的諸困難」を、自己言及的循環（引用(1)を「厳密に」読まないなら）と「弁証法的循環」の二点に要約するのだが、ここから次のように結論して、再びこの二つの循環の混同に陥る。

[...] [従って]『資本論』の中で働いているマルクス主義哲学の対象の同定と認識は、『資本論』自体の対象の種差の同定と認識を前提とし、これはこれでマルクス主義哲学に訴えることを含意し、その発展を要請する [= 弁証法的循環]。マルクス主義哲学の助けなしには『資本論』を真に読むことはできないが、我々はまた同時に、この哲学を『資本論』自体の中に読まねばならない [= 自己言及的循環]。もし、この二重の読解、及び科学的読解から哲学的読解への、哲学的読解から科学的読解への絶間ない送り返し renvoi が、必要であり豊かでもあるのなら、我々は恐らくそこに、マルクスの科学的発見が内部にはらむ哲学的革命、つまり本当に新しい哲学的思考様式を創設する革命を認めることができよう。 (LC, 249-251 傍点及び[]筆者)

ここで、科学的読解と哲学的読解の「送り返し」という言い回しは、決

して『資本論』を読むのに、マルクス主義哲学による読解と区別される科学的読解があるということを意味しているのではない。「送り返し」とは、先程の要点（6）及び引用（2）における「弁証法的循環」のことである。つまり認識の生産の歴史の理論としてのマルクス主義哲学なくしては、マルクスの新しい科学的発見は捉えられないが、この科学的発見によって新しいマルクス主義哲学の構築が要請されるということである。ここで言う科学的読解とは、引用（2）に明らかな通り、マルクス主義哲学という読解方法によって、『資本論』を織り成す科学的言説が表現しているその固有の独自の科学的対象を種差的に把握することを意味している。従ってそれは、『資本論』を読む上での方法ではなく、この方法によって読まれるべき科学的言説の目的＝対象を把握することである。テキストに適用される読解方法は、哲学的読解方法つまり理論形成とその歴史を論じるマルクス主義哲学しかない。そもそも、『資本論』をどう読むかを説明するとき、アルチュセールが「科学的」という言い方をするのは、厳密に言えば、『資本論』の読解の説明としては正確さを欠いていると言わざるを得ない。それというのも、『資本論』の読解に関して、それを「科学的」と形容することは、科学とイデオロギーとの対立関係をあらかじめ前提にした上で言えることであり²⁾、しかも『資本論』の読解の後に初めて言えること——もしかすると、『資本論』は科学的に読むことができなかったかもしれない——であるからだ。

このように解することができるなら、ここには、「マルクス主義哲学の助けなしには『資本論』を真に読むことはできないが、我々はまた同時に、この哲学を『資本論』自体の中に読まねばならない」という哲学的読解方法に関する循環と、この哲学的読解方法と新しい科学的発見の対象＝目的の把握との循環という二つの循環を区別することができるにも関わらず、アルチュセールはこの二つの循環を峻別し得ていない。

方法の循環と方法と目的の循環 だが、この二つの循環は、論理的には明確に区別されねばならない。確かに、『資本論』を読むにあたって、哲学的読解と科学的読解の「送り返し」の有する循環、つまり『資本論』の中で働いている読解方法としてのマルクス主義哲学と、『資本論』が述べる独自の対象つまりその読解の到達すべき目的（マルクスの科学的発見である歴史の科学）の把握との「送り返し」の有する循環はある。アルチュセールは、この「弁証法的循環」にマルクス主義の特性を見る。勿論、この「弁証法的循環」は、ヘーゲルにおけるような目的論的鏡像関係を特質とするものではない。しかし、単純化の謗りを受けることを覚悟の上で敢えて一般的に言えば、それは、方法と目的＝対象との循環、すなわち読解方法によって読解の目的＝対象の把握は限定されるが、逆に読解の目的＝対象の把握が読解方法の改変を迫るという方法と目的の循環である。他方で、マルクス主義哲学の適用に関する自己言及的循環とは、『資本論』に内在する読解方法によって『資本論』を[・][・]読解せねばならないという「二重の読解」の循環である。具体的には、それは、『資本論』の中でマルクスがスミスを初めとする古典派経済学を読んだ読解規則に従って、マルクスの『資本論』を読む（LC, 23, 26）という循環であり³⁾、すなわち方法自体の循環である。従って、方法と目的の循環と、方法自体の循環は区別されねばならない。この区別を貫徹することによって、アルチュセールにとって『資本論』がどのような性格を持つかが、逆に明確になる。つまり、マルクス主義哲学をテキストの読解方法として、そして歴史の科学というマルクスの科学的発見の把握をテキストの読解の目的＝対象の把握と言い換えることができるなら、アルチュセールにとって、『資本論』とは、把握さるべき自らの読解の目的＝対象——さしあたり、アルチュセールの最大の関心事であったマルクスの科学的発見と言われるものの「新しさ」を問題としないなら——を指示する点では、通常のテキストと同様であるが、自らの読解方法をも指示する限りで、例外的な特殊なテキストであり、言

わば自己言及的なテキストなのである。

自己言及性の問題 それでは、アルチュセールは、自らこの種の自己言及性を主張しながら、『資本論』をどのようにして読み始めることができるのであろうか。この自己言及性を主張しながらも、「読み始めることができる」と言うなら、それは、論点先取の論理的矛盾を主張していることになる。

ただし、『資本論』の読解方法に関するこの自己言及性の主張を回避する方策がないでもない。それは、この自己言及性は、まさしく「マルクスへの回帰」というアルチュセールのスローガンを表したものであって、『資本論』の読解方法を論理的に説明したものではないという考え方である。つまり、アルチュセールは、スターリンの教条主義の断罪の後の反動的に生まれたヒューマニズム的マルクス主義に対して、スローガンという形で、つまりイデオロギーであることを承知の上で、この「マルクスへの回帰」を唱え、『資本論』読解の自己言及性を戦略的に主張したと考えられなくもない。確かに、こうしたイデオロギー的戦略がアルチュセールにあったことは否定できないが、しかし、そうしたテキスト外的なアルチュセールの心理的・戦略的局面を抜きにして、『マルクスのために』及び『資本論を読む』というテキストに内在的な立場をとるなら、こうした戦略の存在は肯定できない。それというのも、既に見たように、アルチュセールは、方法に関する自己言及的な循環と、方法とその目的＝対象に関する循環を、テキストのレベルでは明確に区別しておらず、二つの循環を混同しているからである。「マルクスへの回帰」を唱えるアルチュセールの戦略的意図を言うのなら、この立場は、テキストレベルでのこの混同、二つの循環についてのアルチュセールの見誤り＝誤解を説明できねばならない。しかし、これが説明できたとしたら、それと同時に「弁証法的循環」というアルチュセールの主張もスローガンというイデオロギーに還元され

てしまうことになる。

またテキストの読解のレベルでも、次のように自己言及性の問題は回避されるかもしれない。すなわち、アルチュセールがこの自己言及性を言うのは『資本論』の読解の後であって、この意味で自己言及性の主張は事後的なものであり、たとえ『資本論を読む』の文面に方法上の自己言及性を表す文言が読まれるとしても、それは「マルクスへの回帰」を言うアルチュセールの理論的戦略を表すだけで、『資本論』の読解方法と関連づけて自己言及性を問題とするのは、まさしく回顧的な錯覚でしかない、と。しかし、自己言及性の主張は、事後的なものなのであろうか。ヘーゲルの弁証法に「構造上の変革」(PM, 91)をもたらすマルクス固有の弁証法の種差を論理的に厳密化すべき所で、アルチュセールが、論理的には読解の不可能性を主張することにしかない自己言及的循環を「弁証法的循環」と混同しているとすれば、むしろ、この自己言及性の主張は、「弁証法的循環」と不可分に結びついており、こう言うことができるなら、それは「弁証法的循環」の主張の中に折り込まれているのではないだろうか。逆に言えば、アルチュセールによるマルクスの読解の中で、「弁証法的循環」の言説は、自己言及的循環の言説と混同され取り違えられることは避けられず、それによって始めてアルチュセールの言う「マルクスへの回帰」の主張が意味をもつのではないだろうか。

従って、アルチュセールに対して問うべきは、『資本論』の読解に関して自己言及性を主張しながら『資本論』をどのように読むことができるのかではなく、この自己言及的循環の言説は、「弁証法的循環」の言説と混同される限りで、どのような意味効果をもつのか、これである。アルチュセールが『資本論』の読者に投げかけた次の言葉をそのままアルチュセールに投げ返さねばならない。

批判的で科学認識論的な読解においては、我々は、声高に発言された語の下

に、その語が覆い隠している沈黙を聞かざるを得ず、テキストの暗闇の中に稲妻が走る一瞬に、宙吊りにされた厳密さの空白を見ざるを得ない。また相關的に、我々は、連続しているように見えるが、実際は抑圧する言述の脅迫的な侵入によって中断され支配されている言述の下に、真の言述の沈黙した声を聞かざるを得ず、この真の言述の深層の連続性を回復するために、この言述のテキストを再建せざるを得ない。その点で、マルクスの厳密さが欠落している正確な論点を同定することは、この厳密さの認識と一体である。彼の厳密さこそが、我々に彼の欠落を指示してくれる。そして彼の一時的な沈黙のまさにその瞬間に、我々が行うことは、彼自身の言葉を彼に返すことだけである。

(LC, 344)

ラカンの読解 『資本論』の読解における二つの循環の混同＝取り違えの不可避性を検討するためには、それだけでは読解の不可能性に通じる自己言及的なマルクスの読解方法ではなく、アルチュセールの実際の読解方法を検討せねばならない。先の引用の文言、「声高に発言された語の下に、その語が覆い隠している沈黙」、「抑圧する言述の脅迫的な侵入によって中断され支配されている言述」、「欠落」などの言い回しから推察されるのは、フロイトあるいはラカンである。実際、アルチュセールは次のように注記している。

今日我々は、フロイトに関する我々の読解を一変させた成果を、ジャック・ラカンの、長い間孤立していたが、その妥協しない明晰な理論的努力に負っている。ラカンが我々に与えてくれた根本的に新しいものが公的領域に移り始め、誰もが自分なりの仕方ですれを使用し利益を得ることができる時に、私は、[...] その幾つかの効果においてその本来の対象[無意識という対象]を乗り越えている模範的な読解の教えを得たことに対して我々の負債を認めねばならない。

(LC, 7[]筆者)

この引用が示しているのは、アルチュセールは、ラカンの理論的努力を自分なりの仕方を使用し、その模範的な読解方法を学んだということである。そうだとすれば、アルチュセールの読解方法は、論理的に読解行為を

不可能にする自己言及的循環を構成するマルクスの読解方法であるよりも、まずもって実際には、ラカン固有の読解方法を基盤にしている。アルチュセールは、マルクスによる古典派経済学の見解方法、自ら自身によるマルクスの『資本論』の見解方法、及びこのラカンによるフロイトの見解方法、これらを徴候的見解 *lecture symptomale* と呼ぶのだが、マルクスの見解方法とアルチュセール本人の見解方法が自己言及的循環をなし、それによって『資本論』の見解が不可能になっているとすれば、アルチュセールが実際に『資本論』を読むことができたのは、ラカンによるフロイトの見解方法に範をとることによってなのである。

では、アルチュセールは、ラカンの見解方法をどのように解しているのか。

《言語学》という新しい科学の出現なくしては、ラカンの理論化の試みは不可能であった[……。フロイトは、すべてはランゲージュに由来する、と既に言っていた。ラカンはそれを厳密化して、《無意識の言説はランゲージュとして構造化されている》と言う。[……。フロイトは、夢の様々な在り方を置き換え *déplacement* と圧縮 *condensation* の二つに還元することによって、夢の《メカニズム》や《法則》を研究していた。ラカンはそこに、換喩 *métonymie* と隠喩 *métaphore* という言語学によって示された本質的な二つのフィギュールを認めた。こうして言い間違いあるいは書き間違い、失錯行為、機知及び徴候は、夢そのものの諸要素と同様に、シニフィアン *Signifiants* となった。シニフィアンは、《抑圧》の誤認によって人間主体が口述する言説の連鎖を、沈黙の内にすなわち声を出さないで二重化する無意識の言説の連鎖の中に記載される。こうして我々は、言語学が形式的に熟知しているパラドクス、つまり唯一にして二重の、口述的にして無意識的な言説というパラドクスに導かれた⁴⁾。この際、この言説は二重の領域としては、それ自身の内部以外のどこにも存在しない唯一の領域、つまり《シニフィアンの連鎖》の領域のみを有する。こうして、ソシュール及び彼に由来する言語学の獲得物の中で最も重要なものが、主体の口述的言説の過程及び無意識の言説の過程を理解するのに、そして両者の関係、すなわち両者の関係と同一の両者の無関係、つまり両者の重複と両者のズレを理解するのに入り込んできたことは当然のことであった。

(EP, 37)

この引用には、ラカンによるフロイトの精神分析の言語学的読み直しが端的に示されているが、読解方法という点から要約すれば、言語学的領域から借用した「換喩」「隠喩」「ランガーシュ」、特に「シニフィアン」及びその「連鎖」という概念によってフロイトの精神分析理論を「理論化」した点に、アルチュセールはその特徴を見ている。ここでアルチュセールが関心を抱くのは、この「理論化」である。何故フロイトの精神分析理論は言語学的諸概念によって「理論化」可能なのか、「理論化」の可能性に関わるこの本質的な問いは、ラカンに範をとってマルクスを読み直そうと企図するアルチュセールにとって最も重要な問いである。アルチュセールが注目するのは、自らの「マルクスへの回帰」のモデルを提供し、「フロイトへの回帰」を提唱したラカンは、この「理論化」の可能性自体、つまり言語学的諸概念の借用の可能性自体を科学認識論的に解明したという点である。

フロイトは、あらゆる創始者と同じように、現存する、したがって他の目的で構成された理論的諸概念の中で、自らの発見を思考せざるを得なかった[……。フロイトへ回帰することによって課されるのは、[……。フロイトが使用せねばならなかった諸概念の中で、これらの概念とこれらの概念が思考していた内容との間に存在する真の科学認識論的關係 *rapport épistémologique* を同定し決定するために、理論的—歴史的な批判の確固たる作業に専心することである。科学認識論的解明の[……。作業は、[……。ラカンによって始められた。

(EP, 24-25)

ここで言う「科学認識論的關係」とは、さしあたり、既存の諸概念と「それらが思考していた内容」との「真の」結合関係であり、すなわち両者の既存の結合関係をイデオロギー的關係、偽りの結合関係と呼ぶことができるとすれば⁵⁾、精神分析を一つの科学たらしめるような両者の「真の」結合関係を意味する。ラカンは、言語学的諸概念による「科学認識論的な」「理論化」によって、フロイトの精神分析を「反動的なイデオロギー的悪用」及び「生物-心理社会学的修正主義の様々な形態」から救い、一つの

科学たらしめたということである (EP, 25)。

しかし、この言語学的な「理論化」において、言語学的諸概念によるフロイトの精神分析理論の読み直しが外在的・恣意的でないとするれば、それは何故なのか。すなわちフロイトが使用した既存の諸概念を言語学的に読み直すことによって、その既存の諸概念と「それらが思考していた内容」との間に「真の」結合関係を確立できるのは、何故なのか。アルチュセールによれば、「理論化」とは、既存の諸概念が潜在的に含意していた内容を言語学的諸概念によって顕在化する作業ではない。アルチュセールは、「潜在 latent-顕在 manifeste」の図式によって、既存の諸概念と言語学的諸概念の間に「内容」の同一性を架橋することはしない。

重要なのは、語の厳密な意味で生産すること *produire* である。この語は、潜在的であるものを顕在的にすることを意味するように思われるが、しかし、そうではなく、或る意味で既に存在しているもの *ce qui, en un sens, existe déjà* を変形させる *transformer* (あらかじめ存在する原料に、目的に適った *ajusté à une fin* 対象の形式を与えるために) ことを意味する。 (LC, 31)

すなわち (1)「理論化」とは「生産」であり、(2)それは、潜在的なものの顕在化ではなく、(3)「或る意味で既に存在しているもの」(＝「あらかじめ存在する原料」)の変形(＝目的に適った対象の形式付与)である。「理論化」の問題に関して、「或る意味で既に存在しているもの」を「変形」することが、外在的・恣意的でなく、その「目的に適った対象」という形式を付与することであるのは、何故なのか、このように言い換えることができよう。従って、(1)既存の諸概念の中に「或る意味で既に存在しているもの」を「変形」するとは、どういう作業なのか。(2)「目的に適った」とはどういう意味なのか、このように問わねばならない。

隠喩と間隙 ここで、こうしたアルチュセールにおける「理論化」の問題

を考察するのに、隠喩に関するラカンの説明は、その解決の手がかりを与えてくれる。ラカンは、ヤコブソンの失語症の分析⁶⁾を踏まえて、ランガーシュの意味的用法に隠喩的局面と換喩的局面を見る。前者は「相似，代入，選別の関係であり，また選択，競合の関係」，後者は「隣接，整列，シニフィアンの分節化，統辞論的配列の関係」(S III, 249)である。ラカンは、端的に、隠喩を「或る語に代えて別な語」(E, 507)を入れることであり，換喩を「語に語を」(E, 506)結びつけることと解している。言語学の用語を使えば，隠喩は言述の「範列関係 *paradigme*」に関わり，換喩はその「連辞関係 *syntagme*」に関わる。従って，言述化は，一方で，幾つかの語の中から特定の語を選択し代入する隠喩的操作からなると同時に，他方で，幾つかの語を整列させ分節化する換喩的操作からなる。

ラカンがユーゴーから引用した例をとろう。「彼の麦束は欲深くなく，恨み深くもなかった *Sa gerbe n'était point avare, ni haineuse*」は，隠喩的効果を有する。ラカンによれば，「彼の」という所有形容詞は「ボアズ Booz」という人物を指示しはするものの，「麦束」と「ボアズ」の二つの語の間には，「転写のような語の次元への物の次元の重ね合わせ」(S III, 255)というどんな「自然的な」結びつきもなく (E, 890)，また，通常考えられているような両者の何らかの意味つまり両者のシニフィエの相似性や「辞書的な繋がり」(S III, 248)もなく，更には，音素的対立関係(「boue (泥) [bu]」と「pou (風) [pu]」が音素的に対立し対をなす (ibid., 256) ようには，両者はそうした対を成してはいないのだが) ももたない (E, 890)。つまり，「ボアズ」に代えて「彼の麦束」を代入するのは，「物の次元」やシニフィエの次元によるのでもなければ，シニフィアンの音素的次元によるのでもない。それは，「シニフィアンの原初的秩序である統辞法」を基盤にして，共に主語の位置にあるという「位置の相似性」に基づいた「同一化」による (S III, 247-248)。端的に言えば，「代入機能の無限の可能性は，位置の関係を基盤にしてしか考えられず，[…] 隠喩は何

よりも「シニフィアンの」位置的な分節化に支えられている」(ibid., 257 [] 筆者)。

こうしてラカンは、言述化の隠喩的操作の成立条件に、「語に語を」連辞的に結びつける「換喩的分節化の次元」つまり「シニフィアンの形式的な分節化」を見出す(ibid., 259, 261)のだが、言述の有する意味作用の有無という点で隠喩と換喩を区別する。ラカンによれば、隠喩と換喩の違いは、意味作用 *signification* の有無である。ラカンは、ソシュールの記号の図式を逆転させて、シニフィアンとシニフィエの関係を *S/s* と記し、「これは、《シニフィエの上のシニフィアン》と読まれるのであって、この《の上の》はその二つの段階を分離する横棒に应じる」(E, 497)と言う。つまり、シニフィアンとシニフィエを分割する横棒は、「意味作用に抵抗する横棒」(ibid.)であって、「シニフィアンとシニフィエの根本的な二重性」(S III, 136)を意味する。従って、*S/s* という式は、「シニフィアンの下へのシニフィエの絶間ないずれ込み」(E, 502)を表す。隠喩では、この横棒が飛び越され、創作的な意味作用が到来するのに対して、換喩では、この横棒が維持され、シニフィアンの連結があるだけで(E, 515),「徐々に意味作用が空になって行くシニフィアンの戯れ」あるいは「シニフィエが空になって行くシニフィアン」(S III, 247)の連結しかない。

だが、隠喩がシニフィアンとシニフィエを分割する横棒の飛び越しによって意味作用を生み出すとは、どういうことであろうか。ラカンによれば、隠喩の意味作用は、一つのシニフィアンがこの横棒「の下」や背後に対応的に隠し持っている意味作用あるいはシニフィエに由来するのではない。つまり「シニフィアンは意味作用に依存するのではなく、逆に意味作用の源泉である」(S III, 282)から、隠喩の意味作用は、横棒の下に隠された既存の意味作用の顕在化ではない。先の例では、「彼の麦束」は、隠喩的な意味作用を生み出すようなシニフィエあるいは意味作用を隠し持っているのではない。また、ラカンによれば、隠喩の意味作用は、このように単

独のシニフィアンに由来しないからといって、シニフィアンの一つの連鎖の中にあるのではない。

意味はシニフィアンの連鎖の中に[・]_・基盤[・]_・を持つ insister のだが、この連鎖の各々の要素のどれも、それが同時に可能とする意味作用と共に[・]_・存[・]_・する consistier のではない。(E, 502)

隠喩は、或るシニフィアンの連鎖の中に別のシニフィアンを移植することであると定義せねばならない。この移植によって、この別のシニフィアンが押しつけるシニフィアンは、シニフィエの列に落ち、潜在的なシニフィアンとして当初のシニフィアンの連鎖に間隙を存続させ、この間隙の中で、別のシニフィアンの連鎖が当初のシニフィアンの連鎖に接ぎ木されることができる。(E, 708)

つまり隠喩の意味作用は、シニフィアンの連鎖の中に基盤を持つのだが、例えば「彼の麦束は欲深くなく、恨み深くもなかった」というシニフィアンの連鎖だけでは、その要素のどれも意味作用に与しない。隠喩において「無意味の中で意味が生じる」(E, 508) ためには、別のシニフィアンの連鎖が必要とされる。すなわち、「彼の麦束」をめぐるシニフィアンの連鎖に意味作用が生じるのは、「一人の人間の固有名詞のシニフィアン [ボアズ] と、このシニフィアンを隠喩的に廃止するシニフィアン [彼の麦束] との間に」(E, 508 [] 筆者) おいてである。つまり、「彼の麦束」が押しつけた「ボアズ」というシニフィアンは、S/s という式のシニフィエの列に落ちながらも、その横棒を飛び越えて、潜在的な形でシニフィアンの列に復帰し、それによって「彼の麦束」をめぐるシニフィアンの連鎖は、「間隙」を穿たれ、この「間隙」の中に意味作用を宿し、「ボアズ」をめぐるシニフィアンの別の連鎖によって「接ぎ木」される、ということである。換言すれば、隠喩が意味作用を生み出すのは、追い出されたシニフィアンが潜在的なシニフィアンとして「意味作用に抵抗する横棒」を飛び越え、潜在的なシニフィアンを中心とした新しいシニフィアンの連鎖を接

ぎ木することができるように、当初のシニフィアンの連鎖に「間隙」を穿つことによってである。

このように隠喩の意味作用は、潜在的なシニフィアンが当初のシニフィアンの連鎖の中に穿つ「間隙」に由来するというラカンの隠喩論は、単なる文学の修辞論ではない。それというのもラカンも、ヤコブソンと同様に、隠喩を、シニフィアンの分節化としての換喩と共に、修辞論的枠組みの中で論じるのではなく、ランゲージュの意味的用法の可能性の条件として論じているからである。ラカンの言う隠喩的構造と換喩的構造は、「範列関係」と「連辞関係」の言い換えであり、この意味で、あらゆる言述化の可能性の条件である、と言ってもよい。ラカンがフロイトの精神分析理論を言語学的に「理論化」することができたのも、ここに由来する。例えば、フロイトの無意識論における「表象」の言述、あるいはそのエディプス論における「父親」の言説の中に「間隙」が見出され、そこに「シニフィアン」の言述あるいは「父の名」の言説が「接ぎ木」されるように、フロイトの精神分析理論は、それを構成する生物学的及び社会心理学的シニフィアン——これらのシニフィアンの隠喩的構造を看過すれば、アルチュセールが批判する「修正主義」や「イデオロギー的悪用」に陥るしかないであろう——が押しのけた潜在的なシニフィアンが穿つ多くの「間隙」から成っているわけである。

理論化の問題 このようにアルチュセールの言う「理論化」の基盤に、テクストを織り成すシニフィアンの連鎖の有する隠喩的構造を捉えることができるなら、「理論化」に関する二つの問題は、ラカンにおいては次のように説明することができよう。(1)の問いに対しては、既存の諸概念の中に「或る意味で既に存在するもの」とは、潜在的なシニフィアンが既存のシニフィアンの連鎖の中に穿つ「間隙」を意味する。それは、決して潜在的なシニフィアンではない。「既に存在しているもの」あるいは「あらか

じめ存在する原料」と言えば、それは潜在的なシニフィアンを意味しているように思われるが、そうであれば、「潜在-顕在」の図式に戻ることになる。この点で、ラカンが踏襲しているソシュールの基本的な考え方、つまり「言語体系 *langue* の中には、[・][・][・][・][・][・][・][・][・][・] ポジティヴな事項をもたない諸差異しかない」⁷⁾ という基本的なテーゼを喚起せねばならない。つまり、シニフィアンの連鎖の中には、その「範列関係」においても「連辞関係」においても、「差異」あるいは「間隙」しかなく、ここから潜在的なシニフィアンを突き止めるしかない。この現前する「差異」、現前する「間隙」こそが、「理論化」を始める際の「原料」である。潜在的なシニフィアンに関して言えば、ソシュールが「範列関係」について語っていることを捉え直して、それは、シニフィアンの連鎖の中に「ないことにおいて *in absentia*」⁸⁾ 価値を有するのである。そうだとすれば、「ある意味で既に存在するもの」を「変形」するとは、既存のシニフィアンの連鎖に潜在的なシニフィアンが穿った「間隙」の中で、この潜在的なシニフィアンを中心として新しいシニフィアンの連鎖を「接ぎ木」することである。つまり、それは、潜在的なシニフィアンを中心にしてシニフィアンを整列させ分節化する換喩的操作を行うことを意味する。

「目的に適った」とはどういう意味なのか、という (2) の問いは、こうした新しいシニフィアンの連鎖を換喩的に結合することの妥当性に関わる。つまり、ラカンは、フロイトの精神分析理論を言語学的諸概念によって「理論化」し、生物学的あるいは社会心理学的シニフィアンの連鎖に言語学的シニフィアンの連鎖を結びつけた。この (2) の問いを言い換えれば、従って、フロイトのテキストを織り成す生物学的等のシニフィアンの連鎖が、その隠喩的構造によって、潜在的なシニフィアンの列に言語学的シニフィアンを押しつけている、このように言えるのは何故か、ということである。確かに、分析治療の現場を支配しているのは、被分析者あるいは分析者の言い間違いや書き間違いであり、また言語新作などの言語活動

ではある。しかし、このことは、ラカンによる言語学的な「理論化」を正当化しはしない。実際、ヤコブソンやバンヴェニストなどの言語学者もこの分析治療の現場に注目してフロイトを論じるのだが、彼らは精神分析を言語学的次元に還元しようとする意図はなく、両者の間に一線を画している⁹⁾。ラカンは自らの「理論化」の妥当性を説明しているのだろうか。むしろ、ラカンは、フロイトの精神分析理論の中に後の言語学的諸概念の発見を折り込み (E, 446-447, 623, 799), フロイトに「言語学者の有する天才」(S III, 19) を見ることによって、自らの「理論化」の妥当性の説明を回避しているように思われる。あるいはマリーニが主張しているように¹⁰⁾, ラカンでは言語学の位置づけに一貫性はなく、時代によって変化しているとすれば、ラカンは、フロイトを言語学的に「理論化」したものの、その妥当性の説明には常に躊躇していたのではないだろうか。このように解することができるのであれば、ラカンによるフロイトの精神分析理論の言語学的「理論化」は、「目的に適った」というその妥当性に関しては未決定のままに残されていると言えよう。

理論化の問題と自己言及性 このようにラカンでは、アルチュセールにおける「理論化」の問題は、その読解方法を範としたにも関わらず、その妥当性に関しては留保が必要であるとすれば、アルチュセールによるマルクスの「理論化」の妥当性についてどのように考えればよいのか。アルチュセールは、マルクスの『資本論』を、バシュラールの「認識論的切断 rupture épistémologique」概念、友人マルタンの「問題機制 problématique」概念、フロイトの「重層的決定 surdérmination」概念、ラカンの「双数的鏡像関係 relation spéculaire duelle」概念、ソシュールの「共時態 synchronie／通時態 diachronie」概念など多くの借用概念によって「理論化」を行う。この「理論化」は、ラカンにおけるフロイトの言語学的「理論化」ほどの徹底性はないものの、そのイデオロギー論に顕著

なように、ラカンの精神分析理論の基本的特徴を色濃く帯びている。アルチュセールは、マルクスのテキストの中に「徴候的な」用語として「転倒」「現実」「主体」「弁証法」などを指摘し、こうした「用語の下での概念の不在」(LC, 29)に借用概念を充当し、「最初のテキストの中に必然的な不在として現前している別のテキスト」(LC, 23)を再建しようとする。こうしたアルチュセールのロジックは、ラカンのロジックを踏襲していることは疑い得ない。

「理論化」の問題に関して、(1) 既存の諸概念の中に「ある意味で既に存在するもの」を「変形」するとは、アルチュセール自身においては、既存の諸概念から成る共時的な体系が、自ら抑圧した新たな概念（潜在的なシニフィアン）のために、この概念の不在を不均等な差異として抱え込み、この価値決定の不均等性ゆえに通時的に展開することを意味する。アルチュセールは、ソシユールにおける体系内で事項の価値を決定する差異という考え方に、価値決定の不均等性という考え方を導入し、「ヒエラルキーの体系」(LC, 77)をなす諸概念の不均等な差異的価値決定に共時的体系の通時的展開を見ている。「ある意味で既に存在する」不均等な差異によって既存の諸概念の共時的体系が通時的に「変形」するわけである。アルチュセールは、ここに、「徴候的な」用語であるマルクスの「言説化 *Darstellung*」という用語が押しのけた不在の概念を確定する。それは、精神分析から借用した「構造的因果性」あるいは「換喩的因果性」という概念である。つまり、「言説化」とは、「原因の不在」による「その結果における構造の現前の様式」である (LC, 404-405)。換言すれば、「言説化」とは、不均等な差異（不在の原因）による共時的体系（構造）の通時的（その結果における）展開（現前）である、このように言えよう¹¹⁾。

ところで、こうした共時的体系の通時的展開こそは、アルチュセールが言う「弁証法的循環」に他ならない。既に見たように、『資本論』を読む上での「弁証法的循環」とは、読解方法としてのマルクス主義哲学と、読

解の目的としての歴史の科学というマルクスの科学的発見の把握との循環であった。諸概念の共時的体系の中で、その内部にある不均等な差異から潜在的なシニフィアンを中心にして新たなシニフィアンの連鎖を分節化するという読解方法は、歴史の科学を紡ぎ出すこの新たなシニフィアンの連鎖という読解の目的に達する。しかし、シニフィアンの連鎖の有する隠喩的構造と換喩的構造によって、この歴史の科学を構成するシニフィアンの連鎖は、新たな潜在的なシニフィアンの穿つ「間隙」／不均等な差異から、それを新たに充当する借用概念を求めて新たな読解方法を必要とする。

「弁証法的循環」とは、従って、「構造的因果性」というその形式の同一性に依拠しながら、構造（共時的体系）が、潜在的シニフィアンが穿つ不均等な差異／不在によって、これを充当する借用概念を中心とした新たなシニフィアンの連鎖を様々なヴァリエアント（異文）として通時的に生産しつつ、この通時的生産において自ら内部の諸概念（諸々のシニフィアン）の意味関係を変革するプロセスである、と言ってもよい。

(2)「目的に適った」という「理論化」の問題に関しては、これは、マルクスの『資本論』を精神分析論的に「理論化」することの妥当性の問題である。アルチュセールには、この点について次のように言う。

マルクスの理論に精神分析の概念をこのように移すことは、恣意的な借用ではなく、必然的な借用である。それというのも、どちらの場合も問題になっているのは、どのような概念によって、構造による、要素のあるいは構造の決定を考えるべきかという同じ理論的問題であるから。 (LC, 404)

すなわち、マルクス理論においても精神分析理論においても、共に問題となっているのは、構造による決定という共通の問題、つまり「構造的因果性」の問題であるから、ということである。しかし、マルクスの理論と精神分析理論とに共通の問題があるからといって、精神分析の概念をマルクスの理論に借用することが必然的であると言えるであろうか。『資本論』の精神分析的な「理論化」の妥当性を問題としているときに、つまりアル

チュセールにおけるマルクスの『資本論』の読解方法を問題としているときに、回顧的錯覚に陥ることなしには、「同じ理論的問題」が存在する、あるいは「マルクスも同じ問題に注目している」(ibid.)と語ることとはできず、従って、精神分析的な概念の借用を必然的と言うこともできないであろう。では、ラカンと同様に、アルチュセールも、マルクスの『資本論』の中に後の精神分析理論の諸概念を折り込むことによって、精神分析的な「理論化」の妥当性の問題を回避しているのでしょうか。ここで喚起すべきは、アルチュセールが「弁証法的循環」と自己言及的循環を混同している点である。精神分析的シニフィアンの連鎖からなる「弁証法的循環」の説明に関して、その所有権をマルクスに帰すためには、例えば「マルクスも同じ問題に注目している」という言説によって、この「弁証法的循環」の説明の中に「マルクス」の名を折り込むしかない。『資本論』の読解によって得られるはずの「マルクス」主義哲学によって「マルクス」の『資本論』を読むというこの自己言及性の主張は、それだけでは、読解の不可能性にいたるのだが、「弁証法的循環」の言説と混同され、その中に折り込まれることによって、「マルクス」を、その言説を織り成す精神分析的シニフィアンの連鎖を紡ぐ主体として位置づけているのではないだろうか。「弁証法的循環」の言説は、「マルクス」をめぐる自己言及性の言説を欠けば、フロイトあるいはラカンの精神分析理論にその所有権を譲るしかない。この点で、アルチュセールの言う「マルクスへの回帰」は、その自己言及性の主張によって初めて意味を得るように思われる。

注

- 1) アルチュセールの著作は次の略号使用

PM Pour Marx, Maspero, 1965.

LC Lire le Capitale, Maspero, 1965. (1996年 PUF 版使用)

EA Éléments d'autocritique, Hachette, 1974.

EP Écrits sur la psychanalyse, STOCK/IMEC, 1993.

ラカンの著作は次の略号使用

E Écrits, Seuil, 1966.

S III Le séminaire de Jacques Lacan, Livre III, Les psychoses, 1981.

- 2) 実際、アルチュセールは、『自己批判の基礎』の第二章の中で、『マルクスのために』及び『資本論を読む』は、科学とイデオロギーの対立関係を前提にして議論を組み立てていた点を批判している。
- 3) アルチュセールは、この自己言及的循環に関して、それを「罪深い」と言う(LC, 26)。「私が思うに、我々は、原則的な要点を獲得している。罪のない読解が存在しないのは、あらゆる読解は、その教えと規則の中に、真の責任者——その対象を保持しつつ、読解をそれが現在ある所のものに行っている認識観——を反映するしかないからだ」(LC, 32) と言い、『資本論』の読解に、あらかじめ既存の対象を保持している認識観を反映させないように主張する。読解方法の自己言及的循環は、この意味で、「罪深い」のである。
- 4) アルチュセールがここでどんな言語学上のパラドクスを念頭に置いているのか不明だが、文脈上は、個人が自由意志に基づいて発するパロールは、個人の外にあって自由には改変できない言語共同体の規範を構成する諸規則の集合であるラングによって二重化されているという、ランゲージュを構成するパロール＝自由意思とラング＝無意識的強制のパラドクスを意味しているように思われる。ただ、ソシュールがランゲージュの二局面を構成するパロールとラングを形式的に峻別しようとする(Cours de linguistique générale, F. de Saussure, Payot, Paris, 1979, 30-32) のに対して、アルチュセールあるいはラカンは、パロールとラングを峻別しながらも、ラングによるパロールの二重化という形で両者を一つの現象とみなそうとしている。
- 5) 『自己批判の基礎』によれば、「科学認識論」とは、「様々な具体的科学における科学的実践及びその歴史に関する諸条件と諸形式の理論」の意であるが、『資本論を読む』及び『マルクスのために』などの初期では、「思弁的な意味」で使用したため、科学とイデオロギーの対立関係を真理と虚偽の対立関係に還元し、真偽の区別に拘泥したと自己批判される(EA, 52)。
- 6) 「言述の進行は二つの異なった意味論的な線に沿って行われ得る。一つの話題が他の話題をもたらすのは、相似性あるいは隣接性のいずれかによる。前者の場合は隠喩的方法、後者の場合は換喩的方法と呼ぶのが恐らく最も適切であろう。なぜなら前者は隠喩の中に、後者は換喩の中に、その最も凝縮された表現を見出すからである」(R. Jakobson, Essais de linguistique générale, Paris, Minuit, Collection “double”, 1963, p.61)。
- 7) Ibid., 166. ソシュールは、ラング(言語体系)について「ポジティブな事項をもたない諸差異」を言うが、ラカンは、それをランゲージュ(言語活動)やパロール(言葉)、あるいはシニフィアンの連鎖に拡張している。

- 8) Ibid., 171. ただし、ソシユールは「範列」という用語は使用しておらず、「連合 associatif」と言っている。
- 9) ヤコブソンは、ラカンが言語学によって導かれたと言いつつも、ラカンの言うシニフィエに対するシニフィアンの優位性は、言語学者の洞察を深めると言い(『一般言語学』, 川本茂雄監修, みすず書房, 1976, 246頁), 相互の影響の可能性を主張し、言語学の隣接科学として精神分析を捉えている。またバンヴェニストは、フロイト及びラカンの精神分析の方法を、言語学も含めた諸科学の方法と「比較」とするというスタンスをとっている (Problemes de linguistique générale I, Gallimard, 1966, p.75)。
- 10) *Jacques Lacan*, Marcelle Marini, Belfond, 1986, p.58.
- 11) この点については、拙論「アルチュセールにおける《徴候的読解》について—問いと答えのズレの反復／更新／統一」(『哲学』第45号1995年4月) 参照。